きもちは、言葉をさがしている

「紅茶の時間」とその周辺

第39話

水野　スウ

ピースウォーク金沢ものがたり

毎年3月、イラク開戦の日の前後に、平和を願って金沢の街なかを歩く市民アクション「ピースウォーク金沢」は、2020年の今年で20年目になります。最初の呼びかけ人の一人で、長いつきあいになる小原(こはら)美由紀さんとは、ウォーク1回目からよく一緒に行動していますが、その彼女から、これまでのウォークのこと、一度しっかりまとめたいと思うんだけど、と相談されました。

それならウォーク実行委員だけでするより、まだ歩いたことのない人や、途中から実行委員に加わった人、ピースウォークをまったく知らない人もふくめて、まぜこぜおはなし会をしようよ、と提案。「ピースウォーク金沢ものがたり～since 2001」と題してのプレイベントを、わが家の「紅茶の時間」ですることになりました。それはおそらく美由紀さん個人とピースウォーク金沢全体をふりかえることであると同時に、日本の20年を俯瞰する貴重な時間になるだろうな、と予感しながら。

――というわけで、今号はそのプレイベントを通してみえてきたピースウォーク金沢の歴史、それにくわえて私自身のウォークとの関わりについて、書いてみようと思います。

「ブッシュ大統領はバカや!」

2020年2月、紅茶の時間でひらかれた「ピースウォーク金沢ものがたり」。まずは小原美由紀さんの語りから。

彼女がウォークを呼びかけることになったきっかけは、2001年にニューヨークで起きた9.11の同時多発テロでした。テロの後すぐ、アメリカ大統領が、テロとの戦争を宣言。犯人はアフガニスタンにいるとされて、アメリカも世界の主要各国も、戦争に向かってまっしぐらに進んでいくように見えました。

美由紀さんはそれまで10年余り、市民の平和学

習サークルに参加して戦争や原爆について学び（ちなみに私も同じサークルのメンバー）、平和が大事といつだって思っていたけど、それまで特にこれといった行動を起こしたことはなかったそうです。アフガニスタンにはすでに大勢の難民がいて、ただでさえ子どもたちが次々に命を落としていっている、そんな国に爆弾を落とすなんてひどすぎる。でもだからってここで自分が何をしようと変わるはずもない、自分じゃない誰かが何かしてくれたら……そう思っていたまさにその時、たまたまテレビを見ていた当時8歳の息子さんが「ブッシュ大統領はバカや！戦争はゼッタイにダメや！」と叫んだのです。

「その言葉に、ガーン！として。ああ、本当にそうだ、ここで自分が何もしないままでいたら、私は3人の息子の前に親として立てないなあ。やっぱり何かしなくちゃ。だけど一体何をしたらいいんだろう……。わからずにいた時、フェアトレードのお店をしていてネットやメールに詳しい友人が、東京でピースウォークっていうのをしてる人たちがいるよ、と教えてくれた。石川で誰も、何もしないんなら、じゃ自分たちでやるか！と、その友人と、アムネスティ金沢の人と、メールでつながっていたお医者さんと、そして私、この4人でウォークを呼びかけたんです。電話やファックスを使って、あちこち声をかけて」

20年前は今のようにはまだSNSが普及していない時代、そのころやっとパソコンを使いはじめた私も、ファックスでその呼びかけを知って、集合場所の金沢市役所前に駆けつけた一人です。

急遽の呼びかけだったにもかかわらず、120人が集まり、アフガニスタンへの爆撃をなんとかやめて、という祈りの夕べを共有し、「ふるさと」を歌いながら街を歩きました。思いは必死だったけれど、シュプレヒコールが飛びかうような、いわゆるデモとは違う、静かであたたかい、手づくりのウォークだったという記憶があります。それが2001年10月6日、第1回目の金沢のピースウォーク。アフガン爆撃がはじまったのは、その翌日のことでした。

CHANCE！でつながる

美由紀さんが、ネットに詳しい友人に教えてもらって登録したメーリングリストの名前は、CHANCE！　そのリストに参加する人の数は次々ふえて、たちまち1000人もが登録するネット空間になっていったそうです。

当時のことを美由紀さんは、金沢の一主婦がいきなり1000人の広場に放り込まれたみたいな感じだった、とふりかえります。CHANCE！のメーリングリスト上で、様々な情報や意見が飛びかい、ぶつかり、議論し、時に決裂し、時に理解しあい、新しいアイディアが生まれ……。さながらそこは、9.11後に突如生まれたバーチャルな、古代ギリシャの直接民主主義的空間だったのかもしれないな、と想像しました。

そして、これは後からわかったことだけど、CHANCE！の中には、ニューヨークに住む坂本龍一さんもいれば、『世界がもし100人の村だったら』『やさしいことばで日本国憲法』（ともにマガジンハウス）の著者で翻訳家の池田香代子さんもいたし、後にNGO日本国際ボランティアセンター（JVC）のイラク現地調査員として子どもたちの医療支援にかかわることになる原文次郎さんもいたし（彼の曾祖父は、反戦ジャーナリストとして知られる桐生悠々（きりゅうゆうゆう））、当時はまだ20代のジャーナリスト、志葉玲（しばれい）さんもいたのです。

さらに、このメンバーの中から「りぼん・ぷろじぇくと」という一つのプロジェクトがたちあがり、数え切れないほどの意見をメールで交わしあって、2004年に『戦争のつくりかた』（マガジンハウス）という絵本をつくりあげました。当時問題になっていた有事関連7法案についてなんとか広く知ってもらおう、この国が戦争のできる国になろうとしていることをわかりやすく伝えよう、とプロジェクトメンバーが奮闘した結果の絵本です。ここに、池田香代子さんも美由紀さんも、美由紀さんの知人である金沢の弁護士さんも参加していました。

この絵本は10年後にその改訂版として、あらたに平和安全法制の解説も加えた『新・戦争のつくりかた』として出版され、さらには映像作家たちの手

によってアニメーションのDVDにもなりました。

最初の絵本がつくられたころは予想でしかなかった未来が、10年の間に次々と本当の法律として実現され、絵本の通りに現実が進んでいることから、この本は「予言の書」とも呼ばれています。

りぼん・ぷろじぇくと（『新・戦争のつくりかた』が読めます）https://sentsuku.jimdofree.com

戦争のつくりかたアニメーションプロジェクト特設サイト　http://noddin.jp/war/

イラク戦争はじまる

2003年3月20日、国連安保理の決議がないまま、イラク戦争がとうとうはじまってしまいました。当時の小泉首相はいち早く支持を表明しましたが、私たちは支持していないよとあらわしたくて、2月に富山であったピースウォークに美由紀さんも私も参加。金沢では3月と4月に「平和の種をまく　明日へのピースウォーク」をしました。

歌があって、楽器があって、着ている服もプラカードも色とりどり。団体ののぼり旗はありません。シュプレヒコールも聞こえません。一色に統一されていないところがピースウォーク金沢らしい。ちいさな子どもたちも一緒に歩きます。

合言葉は、NO WAR, NO DU。DUとは、劣化ウラン弾のこと。過去の湾岸戦争で多量に使われた劣化ウラン弾の影響で、イラクには白血病などに苦しむ子どもたちがすでにたくさんいたことがわかっていました。

この年には、ジャーナリスト、志葉玲さんの講演会「空爆される側から見たイラク戦争」や、湾岸戦争の影響をうけた子どもたちの写真を多く撮っている写真家、森住卓（もりずみたかし）さんの講演会、鎌仲ひとみ監督のドキュメンタリー「ヒバクシャ――世界の終わりに」上映会などが開催されました。主催はかならずしもピースウォークではないけれど、美由紀さんはそのどれもに関わり、私やウォークのメンバーたちも広報を手伝ったり、参加したりしてきました。

この年の秋には紅茶の時間で、慶応大学物理学教室（当時）の藤田祐幸（ゆうこう）さんから劣化ウラン弾の被害について話していただきましたが、その時も紅茶仲間だけでなく、美由紀さんをはじめピースウォークで出逢った人たちがずいぶん聴きにきてくれました。

ワールド・ピース・ナウ

2004年にかけてはアフガニスタン攻撃、イラク攻撃が激化する時期。この年の3月20日は「ワールド・ピース・ナウ」という名のもとに、全国各地でピースウォークがおこなわれました。同じ日に、金沢でも。準備の段階で呼びかけ団体や呼びかけ人を広く募って、この年の参加人数は500人へとひろがり、参加者の中から「こんなに集まるのはベトナム戦争以来だ」と言う声が聞こえたほどでした。

この時点で、すでに13,000人以上のイラク市民が亡くなっている、とのことでした（イラク・ボディー・カウントの調べによる）。

それだけの人がいのちを落とすって一体どういうことだろう、数で括っては見えなくなるものがあるかもしれない。ということで、金沢ではピースウォークの日に向けて「虹色ハートのいのちのバナー」をつくることに。亡くなったひと一人のいのちを一つのハートであらわすことにして、ハートをバナー（横断幕）に描きこんだり、縫い付けたりしていったのです。何十人もの人に協力してもらったけれども、描けども描けども……とても13,000人分のハート

を描ききることはできませんでした。描き込めたハートはやっと8,888。ああ、こんなにも多くのいのちが失われたんだね……と、ずしんと感じられた、世界に一枚きりのいのちのバナーが、これ。長さ7メートルにも及ぶこのバナーを何人もで持ちながら、イラク戦争による市民の犠牲者を想って歩きました。

3月のピースウォークのあと、イラクで3人の日本人が人質となり、突如巻きおこった、自己責任、という非難の嵐。じっとしていられなくて、この時は私が、ピーススタンディングしよう、と呼びかけました。立った場所は、毎年のウォークの出発地点でもある、金沢の中心街にある公園前。

美由紀さんやウォーク仲間、紅茶仲間が駆けつけ、リレー形式で思っていることをスピーチして、その様子を新聞に取材してもらいました。格別大きなアクションでなくても、何かしよう！という時、即こんなふうに声かけできるネットワークがあって行動できたのは、やはりピースウォークという市民アクションが下地にあったおかげかもしれません。

この年、「九条の会」が発足し、それに呼応した動きが日本全国にひろがり、石川にも「九条の会・いしかわネット」が誕生。私も呼びかけ人の一人になりました。私が憲法のおはなし出前に行きはじめたのも、ちょうどこの頃からでした。

いつもとちがう空を見よう

2005年から2010年にかけては、イラク戦争がまだ続いていたけれど、社会では戦争への関心が薄れてしまった時期かもしれません。団体呼びかけから再び個人参加へと、ウォークの形態も変化し、参加人数が300人の時もあれば150人の時も。それでも、ピースウォーク金沢は、いつも誰かしらが呼びかけ人となって、毎年継続されてきました。2005年のピースウォーク後の4月には、池田香代子さんをお呼びしての「100人の村から憲法が見えた」という講演会がひらかれましたが、主催よびかけ団体の一つにピースウォークも加わっています。

ピースウォークでは、呼びかけ文が毎年少しずつ変わります。2006年のウォークは、「いつもとちがう空をみよう」がテーマ。ウォークしながら見上げる空は、そう、確かにいつもと違います。何より、歩道じゃなくて車道を歩くし、知ってる人知らない人と一緒に歩くし、歌も歌うし、そしてその空がイラクともつながっていることを感じながら歩くからです。この年はこれまでの最高の39グループ（平和や音楽、アート、子ども、食などの活動を日頃している人たち）の呼びかけによるウォークとなりました。

2007年のテーマは「踊るように歩こう」、2008年は、「いっしょに歩かんけぇ～」（石川弁で「一緒に歩かない？」）。2009年は、フライヤーの呼びかけ文を、日本語だけでなく、英語や中国語など4カ国語で表しました。イラクだけが戦場ではない、チベットでもパレスチナでも、人権がひどく踏みにじられていることに気づいてほしいと思ったのです。この年は、環境活動家で未来バンク理事でもある田中優さんが参加し、ウォーク前の集会でお話をしてくれました。

2010年は、「ほしいのは、ピース」。このテーマと同名の、歌まで生まれた年でした。作詞作曲は、巻達彦さん。

わたしのまちで　平和を願う
人が集まって　歩く
そんなことが　9年まえ
はじまった　すてきだね
いつも　はずかしくて
言えなかったけれど
いちばん　いちばん
ほしいのは、ピース

ガレキのまちで　おびえながら
毎日過ごす　人がいる
石油がとれる　ことを理由に
ねらわれる国がある
とどけ　ぼくらの
平和の祈り
いちばん　いちばん
ほしいのは、ピース

この頃から私がかかさずウォークに持っていくようになったのがこのピース旗。既成のものに、私が

家族の思い出の布をいっぱい縫い付け、Peaceの文字もアップリケしたものです。

3.11後のピースウォーク

2011年のピースウォークを準備している最中の3月11日、東日本大震災が起き、その翌日に福島原発が爆発しました。その直後に予定されていたウォーク、ましてや当日は雨。「こういう時だからこそ歩こう」という声がある一方で、「放射能もまじっているだろう雨の中を、子ども連れで歩きたくない、歩かずに語りあいたい」という声もあり、この日は、それぞれの希望する方に別れて、ピースウォーク＆ピーストークをした年になりました。

原発事故による放射能に怯える暮らしは、けっして平和とはいえない。安心して空気が吸えて、食べ物を口にできて、子どもたちを公園で遊ばすことができて、そういった当たり前の暮らしを守るためには、意思表示が必要なんだ。その受け皿としてもピースウォークはあるはず、と感じたこの年のウォーク。ピースウォークの願う平和は決して、遠い地のNO WARだけでなく、自分の足元のことなんだと、みなが強く感じた年でもあったのです。

2012年あたりから、ピースウォーク金沢のかたちが少しずつ変わっていき、歩くだけでなく、ゲストをお呼びしてのイベントとコラボするようになりました。今この国で起きていることをもっと知ってほしいと思ったからです。

前にも金沢に来ていただいた森住卓さんに再びの講演をお願いし、それにひき続いてのウォーク。森住さんをお呼びするためのお金は、森住さんの写真集『福島第一原発　風下の村』（扶桑社）や、福島で被災した武藤類子さんが2011年9月に東京でおこなわれた「さようなら原発5万人集会」でスピーチした内容を本にした『福島からあなたへ』（写真は森住さん、大月書店）を売りまくって捻出する、という方法を美由紀さんが考えだしてくれました。

2013年はフォトグラファー、亀山ののこさんと、彼女が撮影した「100人の母たち」写真展と、ピースウォークとがコラボした年です。原発の事故後、ののこさんは東京から生後半年の双子の坊やとともに福岡に移住。それまでの仕事を失うかも、と一瞬頭をよぎったけれど、たとえ失ったとしても原発というものにNOと声をあげなければ、と思ったそうです。写真集『100人の母たち』（南方新社）には、ののこさんと同じように、日常生活の中から原発の問題と向き合い、命を守りたいという意志をあらわした100人の母と子のポートレイトが収められています。

この頃には、3.11後に金沢に避難移住してきた人たちとイベントなどを通してつながりができ、家族でピースウォークに参加するようになりました。

13年秋頃から暮れにかけて、東京の国会前では特定秘密保護法案に反対するデモが盛んにおこなわれていました。その中で特に、学生さんたちのスピーチが際立ってすばらしかった。なぜこの法案に反対するのか、一人称単数の「私」や「僕」を主語にして語る彼らの言葉を、美由紀さんはこの頃からたんねんに書き起こしては、Facebookに投稿していました。

年の瀬も迫ったある夜、ピースウォークの打ち合

わせによく使わせてもらっているライブ喫茶で（マスターはウォークのメンバー）、美由紀さんが彼らのスピーチ映像を見る会を開いてくれました。おかげで当時まだFacebookをしていなかった私もウォーク仲間と一緒に彼らのスピーチを見聞きすることができたのです。

その学生たちのグループ名はSASPL（サスプル）、正式名は「特定秘密保護法に反対する学生有志の会」。翌年に誕生するSEALDs（自由と民主主義のための学生緊急行動）の前身となったグループでした。

考えることをやめない

ピースウォーク実行委員会では毎年秋になると、次の年のテーマをどんなものにするか話し合いをはじめます。テーマ決めだけに何回も集まることもありますが、2014年のそれは、「歩き続けよう　考えることをやめないで」に決まりました。それまでのウォークを通して、思考停止しないで、面倒くさくても考え続けることの大事さを、みなが実感していたからです。

この年は、ウォーク当日までの間に、特定秘密保護法がどういうものか、ウォーク仲間の弁護士さんにお願いして小さな勉強会を開いたり、映画『ハンナ・アーレント』を見た人たちとのワークショップ、鎌仲ひとみ監督のトークと監督の動画メルマガをまとめた『カノンだより』上映会、フランスの寓話絵本『茶色の朝』（大月書店）朗読会、といったウォーク・プレイベントをしました。

ピースウォーク当日は、原発事故の後、福島を離れた宇野さえこさんが移住先の京都から参加して、出発前の集会でスピーチをしてくれました。

その翌日は石川県小松のお寺で、さえこさんのお話会。除染したから帰還していい、といわれた地域でも、暮らしの中に放射性物質をつめこんだ黒い袋がそのまま置かれている現実。福島県内では安全キャンペーンがさかんだけど、人権として被曝を避ける権利があるということをもっと知ってほしい、と。お話の最後に「昨日は、いま一番大事なことを伝えている人たちに会えました。関東から避難して来た人たちとも合流できたのは、10年以上も、ピースウォークを続けてきてくれた人たち、ともしびを灯し続けてきてくれた人たちがいたからです」と。

この日お寺には、愛知県田原市の絵師、小林憲明さんが描いた「ダキシメルオモイ」の絵が7枚展示されていました。福島県二本松市の7人のお母さん（『カノンだより』にも登場していたハハレンジャーたち）が、それぞれのお子さんを抱きしめているいとおしい絵。思いがけなくその絵を紅茶の時間でひと月お借りできることになり、4月はじめ、ダキシメルオモイの絵の中でピースウォークふりかえり会をしました。そこに小林憲明さんも参加してくださり、その出会いをきっかけに、関東から金沢に移住してウォーク仲間になった親子たちの姿もまた、ダキシメルオモイの中で描かれることになったのでした。

この年から6年間、ダキシメルオモイ展が石川県内のいくつものカフェやお寺でひらかれ、それはいつもピースウォークと連動していました。

小林憲明　ダキシメルオモイ
https://dakisimeruomoi.jimdo.com

2014年から始まったピースウォークの新しい試み、「Peace割」（後に「ピース割引」）についてもふれてお

きます。杉並区高円寺で行われていたデモ割り（デモに参加した人にお得な割引）にヒントを得て、ピースウォークに参加した人は、まわりの商店街でお得に食べたり飲んだりできますよ、という新企画です。ウォークの主旨に賛同、応援してくださるお店の平和に対する意思表示であると同時に、市民の側もそういうお店に感謝しながら利用することで商店街にお返ししよう、という意図から始まったもの。

このピース割引はそれ以後もお店の数をふやし、範囲もひろがって進化しながら続いています。協力店のお店の名前がずらりと並んだフライヤーを手にした人に、ピースウォークってこんなにたくさんのお店に応援してもらってる市民アクションなんだね、と感じてもらえるメッセージにもなっています。

2015年、いくつものピースウォークカフェ

ピースウォークは毎年この指止まれ方式でウォーク実行委員会をつくり、テーマや関連企画を決めるために対話を重ねます。震災から4年目となり、原発事故後に移住してきた人たちもこの委員会に加わってくれるようになりました。

とりわけこの年の委員会にはそれまでにないような熱気が感じられました。第2次安倍政権になってからというもの、秘密保護法の強行採決、これまでの憲法の解釈を変えることになる集団的自衛権行使容認の閣議決定、それを根拠にしたあたらしい安保法案などなど、国民が置いてけぼりのまま、重要なことが次々と進んでいたからです。この年のテーマは、自分たちの言葉で政府のやり方をきちんと批判するSASPLの学生たちのアクションから影響をうけて、「つながろう、集まろう！　語ろう、自分の言葉で」と決まりました。

さて、それならこのテーマの、つながる、集まる、をどう実践しよう。当日のウォーク前に、いくつもの「ピースウォークカフェ」をするのはどう？　個々のサイズはちいさくていいから、今国会で何が起こっているのかを知るために憲法や安保法案を学ぶ場、憲法の解釈を変更した先につながる戦争や平和について語る場をそれぞれがつくりだしていくことにしよう、と決まりました。

その日までのPWカフェをあげてみると、弁護士さんとおでん囲んで自民党の憲法改正草案を学ぶ憲法カフェ、幼子を持つママたちとベビーのPWカフェ、戦争や平和の絵本を読む絵本カフェ。紅茶の時間では『戦争のつくりかた』の紙芝居を上演後、憲法を語りあうPWカフェを、といった具合。中でも特記すべきは、SASPLの奥田愛基くんに金沢に来てもらって、「いのちの授業」で知られる大学教授、金森俊朗さんと対談するイベントをしたことでしょうか。

集団的自衛権を認める安保法制に対する危機感は、この年に私の中でもピークに達し、以前から憲法のお話出前で語ってきたことを中心に、『わたしとあなたのけんぽうBOOK』という本までつくりました。その本の中で、この年のさまざまなピースウォークカフェについても記しています。

2015年12月にはピースウォーク主催でSEALDsメンバーの二人、元山仁士郎くんと伊勢桃李（とうり）さん講演会を。のちに元山くんは米軍基地建設のための埋め立ての賛否を問う「『辺野古』県民投票の会」の代表となりました。

PeaceにVote！

翌2016年は、7月に行われる参議院選挙に向けて野党共闘という言葉が生まれた年です。ピースウォークもそれを意識して、その年のテーマを「抱きしめるだけでは守れない　PeaceにVote！」と決めました。夏には選挙があるよ、大事なものをただ抱きしめているだけで平和は守れない、だから選挙に行こう、平和を目指す人にちゃんと投票しよう、の意思をテーマにこめたつもりです。この年のピースウォークには、SEALDsの本間信和くんと植田千晶さんが参加。ウォーク翌日、SEALDsの二人と金沢の若者たちとのトークイベントも行いました。

2016年のテーマを記したバナーは、夏の参院選でも大活躍。野党共闘のために金沢入りした、野党党首によるサインがはいって、これまた世界に一枚きりのバナーになりました。別名「野党は共闘バナー」です。

バナーを持つ美由紀さん

投稿をみた友人が、これ音読したい、と美由紀さんにコメントしたことから、あっという間の素早さで、国会答弁を市民が音読するアクション「コッカイオンドク！」がはじまったのです。記念すべき第1回オンドクは、美由紀さんはじめ5人の参加でわが家で行われ、それを2社の新聞記者さんが取材し大きく報道してくれました。（詳細はマガジン30号に。https://www.humanservices.jp/magazine/number30）

この年の暮れから金沢でも、アニメ映画『この世界の片隅に』が話題となり、映画を見た人たちと語りあう会を2度開催しました。戦争の時代とは、ごくふつうの人たちが巻き込まれ、協力させられ、何気ない日常の上に爆弾が降ってくるのだということをリアルに感じさせてくれた作品。ウォークのメンバーたちの多くがこの映画を見たこともあって、2017年のテーマは、なんと大胆にも「ごはんとミサイル」！　それはまだ北朝鮮からミサイルが飛んできていなかった春のこと。この年の秋の衆院選で、安倍首相の選挙キャッチフレーズの一つが、北朝鮮のミサイルを意識した「国難突破」だったことを思う時、まるでピースウォークが予言しちゃったみたいだね、と仲間たちと言いあったものです。

コッカイオンドク！はじまる

2017年の国会で大きな問題になったのが、テロ等準備罪ともよばれた共謀罪法案。犯罪を起こしていないのに、相談しあっただけで罪に問われるかもしれない、国民の自由やプライバシーを侵しかねない重要法案が、審議もきちんとされないままものすごいスピードで国会を通りそうになっていたのが4月、5月のこと。

美由紀さんは、なんとかこの法案のことを広く知らせなくては、と国会中継を録画して、共謀罪法案の質疑のポイントとなるやりとりをたんねんに文字起こしして、Facebookに投稿していきました。その

国会審議をそのままシナリオにして、市民が首相の役をしたり、法務大臣の役をしたり、あるいは野党議員になりきって音読すると、国会が一気にみぢかになります。なるほど、こんなすごい方法があったんだ！と市民発のこのアクションは、メディアとSNSを通じてたちまち全国へと広がり、1ヶ月後に美由紀さんがよびかけた「全国一斉コッカイオンドク！」では、全国44箇所で、市民によるコッカイオンドク！が繰り広げられたのでした。

共謀罪法案は6月に強行採決されたけれども、このアクションはそこで終わりませんでした。モリカケ疑惑を解明せよ、と野党が臨時国会をどれほど要求しても国会は開かれず、開いたと思ったらその日に解散、衆議院選挙へ突入しました。その選挙期間中、金沢では何度もコッカイオンドク！をしました。このアクションが、政府批判のためでなく、国会の現実を知らせるものだったから、選挙の間も遠慮なく実行することができたのです。

この「コッカイオンドク！」、市民が主体のユニークで新しい情報流通、と評価され、美由紀さんは2017年度の「日隅一雄情報流通促進賞」の特別賞を受賞しました。コッカイオンドク！に参加した金沢の私たちはもとより、全国で実施した人たちもどれだけこれに勇気を得たかしれません。

コッカイオンドク！のWEBサイトでは内容が日々更新されていて、どこでもどなたでもすぐにやって

みることができます。https://believe-j.jimdo.com

コッカイオンドク！とコラボ

「アンテナ立てよう！わたしの明日のことだもの」をテーマにかかげた2018年のピースウォークは、これまでになく大掛かりで特別なものになりました。コッカイオンドクの進化系ともいえる「全国コッカイオンドク！コンテスト」というイベントパフォーマンスを、ウォークの前に実施したのです。舞台は、金沢のど真ん中にあるショッピングビルのステージ。審査員は大学教授、弁護士さん、カフェのオーナー、審査委員長はなんと、「報道特集」キャスターの金平茂紀さん。コンテスト、とはいっても、その評価基準は、1に表現度、2にわかりやすさ、3に次に国会をみたくなる度、の3つです。

当日は、大阪から、関東から、地元から、5つのグループが、それぞれに選んだ国会答弁の場面を熱演オンドクしました。ステージの周りは立ち見の人でいっぱい。ウォーク参加者だけでなく、買い物にきた人もつい立ち止まって、思わず聞き入る珍答弁。おおいに笑いながら、でも、これ、国会の本当の話なんだ、怒らないといけないことなんだ、と気づいてはっとする場面が何度もありました。

一人のお母さんの地道な書き起こし作業からはじまったものが、広がりに広がって社会運動にまでなっていった。私たちは微力だけど決して無力ではないと教えてくれた、これは貴重な経験の一例です。

2019年は、特別のイベントをしない、ゲストも呼ばない、ピースウォーク本来のかたちにもどってのウォーク。かかげたテーマは「未来はこどもたちのために」。それでも前年のコッカイオンドク！つきピースウォークの名が広く知られたこともあってか、県外からピースウォーク金沢に参加したい、と泊まりがけで石川に来てくれた人たちが何人かいました。前日にはその人たちもまじえて、紅茶の時間でピースなコミュニケーションのワークショップ、夜には先述のライブ喫茶で前夜祭。ウォーク当日は、すっかり親しくなった県外の人たちを先頭に、歌いながら踊りながら街を歩きました。その様子があまりに楽しそうだったのでしょう、イタリアから観光できていたご夫婦が、途中から飛び入り参加で私たちと一緒に歩いてくれました。

社会と連動するウォーク

イラク戦争の前後、日本各地でおこなわれていたピースウォークですが、こうして毎年かかさず継続してきたのは、現在、金沢だけのようです。ピースウォークって何？と人に訊かれた時、金沢で20年続く、年に一度、平和を願って金沢の街を歩く市民アクションだよ、とさくっということが多かったけれど、今こうしてあらためて眺めてみると、いやいや、ピースウォーク金沢って決してそれだけのもんじゃなかった。記憶と記録をたどり、ざっとふりかえっただけでもこれだけ豊かにあったウォーク20年の歩み。そうか、私たちはその間ずっと社会や政治と向き合い、連動しながら歩いてきたんだな、と感じました。

9.11のテロからはじまり、戦争にNO！と声をあげ、原発事故を経験し、原発にもNO！と言い、毎年のピースウォークやそれにつながるアクションにはいつも、世界の、日本の、その時々の社会状況や政治が反映されていました。特定秘密保護法も安保法制も共謀罪も、ウォークと無関係ではなかったのです。

2001年も、それから10年後におきた東日本大震災と福島原発事故の時にも、そして今いっそう強く思っていることだけど、とんでもなくひどいことや想定外のことが起きた時、どこから情報を得るか、誰とつながるかって、ものすごく重要なこと。20年前とくらべて、メディアの多くが政権に忖度し、同調圧力を掛けあって、権力にとっての不都合な真実を知らせない方向に傾斜していっているから、なおのことです。

マスコミ報道をうのみにしないで、信頼できる市民や研究者が自ら集めた情報を共有し、役立つ情報をどれだけ持てるか。知ることは力です。そんなネットワークを持つことで、自分の判断も、周りの人たちと一緒にできる行動も、大きく変わってきます。

美由紀さんが2001年の時点でCHANCE！を知ったことの意味は、だからとても大きい。彼女がそ

の時につながった人たちの何人もが、その後のピースウォークやそれにつながる講演会、市民アクションにたびたび登場してくださいました。昨年、桐生悠々のひ孫にあたる原文次郎さんにはじめて会えたのも、さかのぼれば20年前のCHANCE！で美由紀さんが原さんとつながってくれていたおかげでした。

美由紀さんは、社会で、国会で、いま何が起きているか知るためのアンテナを張り、すてきな活動をしている人を見つけてはキャッチしてつながり、そこから得た情報を不断にSNSで発信しています。地元の記者さんたちとも日頃からいい関係性をつくり、市民の小さなアクションでもタイムリーに行動をおこせば報道してもらえることを経験で知っています。

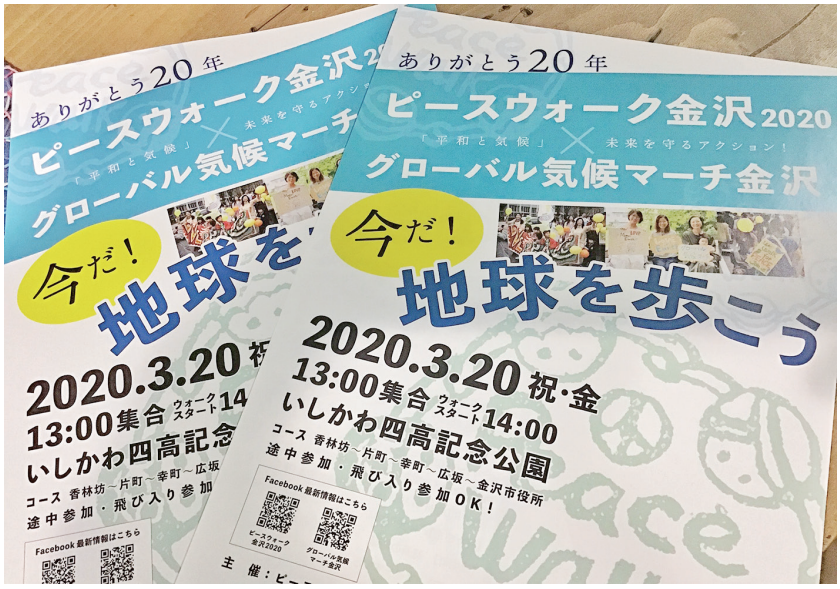
平和のために自分ができることは何だろうと考え、工夫する美由紀さんは、不断の努力を日々普段からしている、文字通り、憲法でいうところの「12条する人（第12条：憲法が保障する国民の自由及び権利は、国民の不断の努力でこれを保持しなければならない）」です。

そして、美由紀さんが知らせてくれたことに対して、自分も黙っていられない、と集まったピースウォークの仲間もみな、12条する人です。ピースウォーク金沢に代表はいません。職業も年齢も様ざま。デザインや広報や音楽やアイディアを出す名人などなど、それぞれ違う得意分野をもちよって、対話×対話の積み重ね。私にとってのピースウォークは、民主主義を練習し、実践する場、市民力を育てる学校のようにも思えます。

ウォークを特別なものじゃなく、身近なものにしたいよね、と知恵を出し合いながら、できるだけ敷居を低くして、テーマにかかげる言葉もきつくしないで（例外もあったけど・笑）、誰でも気軽に参加できる、平和の意思表示の受け皿というスタンスを維持しつつ、歩き続けてきたのです。

年に一度のウォークに限らず、臨機応変しなやかに、スタンディングも講演会も写真展もカフェもイベントもしてきた。20年目になるピースウォークだけど、それを単純に20回目と呼べないゆえんです。

2020年春、掲げるテーマは、「今だ！地球を歩こう　ピースウォーク金沢×グローバル気候マーチ金沢　――平和と気候　未来を守るアクション」です。



2019年秋ごろからメディアで大きく取り上げられるようになった、世界中の若者たちによる気候変動マーチ。金沢でも、地球温暖化はもう待ったなしの危機、と立ち上がった子育て真っ最中のお母さんたちがいて、「グローバル気候マーチ金沢」という様々なアクションを展開しはじめました。このグローバルマーチとピースウォーク、両方のメンバーがつながったことから、2020年はともに街を歩くことになったのです。

新しく出会ったグローバルマーチの、子育て世代の人たちとまざりあいながら私もウォークします。地球の平和を思う、願う、行動する、そこからまたどんな新しい物語が紡がれていくでしょう。そしてピースウォークは続く……。

2020/2/22